

地域とつながる児童館づくり

～「子どものための児童館とNPOの協働事業」から学ぶ協働のコツ～

実践

ハンドブック





NPOどんどこプロジェクトに寄せて

「子どものための児童館とNPOの協働事業（NPOどんどこプロジェクト）」は2007年にスタートした。この年は住友生命の創業100周年にあたり、当財団においても、それまでの高齢者や要介護者といった社会的弱者への支援の枠組みを子どもたちにも拡大する事業として、協賛という立場で参加させていただくことになった。以来14年、のべ321の児童館が各地域のNPOと協働し、その他の団体も巻き込みながら、地域全体で子どもたちの主体性を育み、同時に地域の抱える諸課題にも取り組む活動を行ってきた。そのテーマは、防災、自然学習、農業体験や食育、地域文化の学習など実に多様で、その時々、時勢の影響を受けながらも、一貫して子どもたちの健やかな成長と地域での顔の見える関係づくりに役立ってきたのではないかと考えている。

2020年、新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行（パンデミック）が起こり、世界中の人々がこの未知なるウイルスと様々な形で闘っている。新型コロナは人と人の接触から感染が広がっていくことから、特効薬もなく、ワクチンも日本ではまだまだこれからという現状でその広がりを阻止するには、人と人の接触をできるだけ避ける必要がある。私たちが社会生活を営んでいく上で最も大切な人と人の繋がりを阻む何とも厄介な存在だ。

新型コロナ感染防止対策として、新たな生活様式（ニューノーマル）が登場し、これまで人と人が実際に顔を合わせ、相手の顔色や口調、その場の雰囲気などを敏感に感じ取って成り立っていたやり取りが、ややもすると感情の機微や真意が伝わりにくい、SNSや画面越しのコミュニケーションなど、簡易で便利な手段に急速に置き換わりつつある。

世上、コロナ後もこの流れが後戻りすることはないと言われているが、こんな時代だからこそ尚更、これまで「どんどこ」が目指してきたものが一層重要に思えてくる。本当に大切なのは、目には見えない何かだ。地球温暖化などによる環境破壊や自然災害の激甚化、人口増や経済活動拡大による食料や資源枯渇の問題、高齢化進展による健康・介護の問題、私たちの社会は、人類がこれまでに経験したことのない深刻な危機に直面している。どれもまったなしの喫緊の課題だ。しかし、どんな状況にあっても、人と人が支える価値が変わることは決してない。「どんどこ」が地域で培ってきた“こころ”や“繋がり”がこれからも受け継がれ、次代を担う子どもたちの健やかな成長や思いやりのある豊かな社会づくりに繋がっていくことを願ってやまない。

一般財団法人 住友生命福祉文化財団
福祉事業部長 水谷 剛



目次

NPOどんどこプロジェクトに寄せて	2
一般財団法人住友生命福祉文化財団 福祉事業部長 水谷 剛	
NPOどんどこプロジェクトとは	3
児童館とNPOの協働、5つのコツ	5
事例紹介1 ふたば児童館（山形）	7
事例紹介2 森の子児童センター（沖縄）	8
事例紹介3 福知山市立南佳屋野児童館（京都）	9
事例紹介4 鴨島児童館（徳島）	10
タイムラインで見てみよう	11
タイムラインを作ってみよう	13
プロジェクトに参加した児童館	15
NPOどんどこプロジェクトを振りかえって	17
一般財団法人 児童健全育成推進財団 事業部 課長 芳網 良	
特定非営利活動法人日本NPOセンター 事務局長 吉田 建治	



プロジェクト概要

「子どものための児童館とNPOの協働事業」とは (通称：NPOどんどこプロジェクト)



「子どものための児童館とNPOの協働事業」は、全国のNPOがいきいきと活動できる環境を作る活動をしている特定非営利活動法人日本NPOセンターと、児童館（放課後児童クラブ・母親クラブ）を応援し、子どもたちの健全育成を支える一般財団法人児童健全育成推進財団が、一般財団法人住友生命福祉文化財団の協賛を受けて2007年度から2020年度まで実施したプロジェクトです。

子育てをめぐる環境が、多様なライフスタイルの広がる現代に適応できていないという課題を受け、学校や子育て活動に取り組む団体では、さまざまな工夫を行っています。そのような中で、子どもたちが能力を育み、成長するために必要な機会にアクセスができ、健全に育つ環境を作るためには、「地域ぐるみで共に支え育ちあう」仕組みを、多様な主体の「連携」で作ることが不可欠であると言われています。

そこで、行政の縦割りを超えて地域の課題に主体的に取り組んでいるNPOと、子どもの拠点として活動している児童館との連携によって、子どもが地域の資源や課題に触れる機会を提供し、子どもたちと地域が共に気づき、学びあう環境を作ることを目指して、本プロジェクトの取り組みが始まりました。

初年度に、この新しい取り組みが太鼓をみんなで打ち鳴らすように「どんどこどんどこ」広がるようにと、「NPOどん

どこプロジェクト」という通称をつけました。当初4年間は全国5府県のモデル地区を指定する形でのプロジェクトとして実施。当初想定していた「児童館とNPO」をこえて地域の多様な主体の連携が生み出され、プロジェクトに手応えを得たことから、2011年度からは、児童館の公募型助成プログラムに移行しました。2020年度までに全国33都道府県、321児童館が246プロジェクトを実施しました。公募形式に移行したことで、実施地域が広がったことはもちろん、現代的な課題解決をめざしたプログラムが実施されるなど、プロジェクトが文字通り「どんどこどんどこ」広がりました。

また、2018年に改正された「児童館ガイドライン」では、児童館の拠点性・多機能性・地域性、0歳から18歳までの幅広い世代の子どもたちをカバーできる役割が、改めて認識されました。各地のプロジェクトは、これらを体現するものでした。

2020年は新型コロナウイルスの感染拡大により、学校の長期休校や「三密」を避けた生活、地域行事の縮小など、子どもたちの成長に大きな影響を及ぼす変化が生じました。そのような中でも、プロジェクトを実施した児童館では、子どもの声を大切にしたり、さまざまな手法の活動が展開されました。子どもたちが元気に活動する姿は、児童館スタッフ、協働団体をはじめ、地域の大人たちも元気にする力があること、「NPOどんどこプロジェクト」の持つ価値を改めて感じる年となりました。

「NPOどんどこプロジェクト」で取り組んだテーマ（一部）

多世代交流／多文化共生／国際交流／まちの活性化／空き家問題／居場所づくり／自然体験／伝統文化の継承／バリアフリー／地域間交流／農業体験／食育／地域防災／防犯／リサイクル／環境保全／地場産業振興／メディア発信／表現活動／提言活動／あそび開発／出前児童館

■プログラムに関わる多様な事業関係者（イメージ）



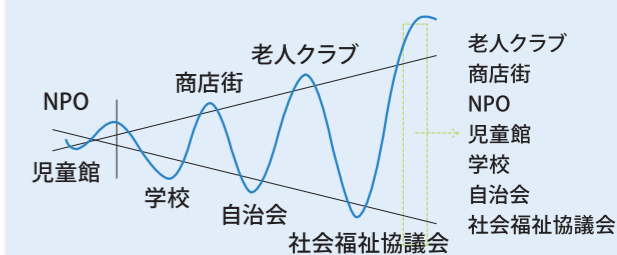
NPOどんどこプロジェクトは「ひろがる」

「NPOどんどこプロジェクト」は、2007年度のスタート以来、『児童館』と『NPO』の協働に重きを置いてきましたが、年を重ねるうちに、児童館とNPOを超えて、多くの方たちが関わる事例が増えてきました。児童館とNPOがタッグを組み、新しい価値を創造しようと模索する中で、取り組みに協力したい、参画したいと思う人たちが名乗りを上げてくれたり、さらなる協力者を紹介してくれたりすることで、音の波が広がるように、当初の想定を超えて協力者が広がったという報告が相次ぐようになったのです。

日ごろは接点が多かった、あるいは少なかった人や組織が関わり、お互いに刺激を受け合うことで、プログラムがさらに発展するだけでなく、参画した人や組織も変化してきました。プロジェクトの報告では、「プログラムをきっかけに地元自治会や商店街とつながった」「児童館の取り組みが核となり、町全体で防災に関する取り組み意識を向上することにつながった。今では地域全体で取り組む行事になった」「取り組みがメディアに取り上げられ、協力したいという申し出を多数いただいた」「新たな活動につながった」など、多彩な広がりが生じています。

「参加したい」と感じるのは地域の人だけではなく、子どもも同様です。2015年度に「NPOどんどこプロジェクト」に採

■事業開始後に起こったステークホルダーの広がり



択されて活動を実施した児童館を対象に、プロジェクト後の変化についてアンケート調査を行ったところ、小学生の月平均の来場者数が平均15.8%の増加、中学生の月平均の来場者数が平均13.2%の増加となりました。幅広い年齢層の利用が増え、0歳～18歳までを対象とした活動ができる児童館の特徴を発揮できる環境づくりにも寄与したことがうかがえます。

具体的な「ひろがり」や「変化」は、事例報告ページで紹介しています！





児童館とNPOの協働、5つのコツ



1. 主役は子ども

プロジェクトの主役は子どもたち。子どもたちの「やってみたい」活動であることが大切です。

こうあってほしい、という大人の思いが先行しすぎて、「やらされた感」で終わってしまっは残念です。

子どもたちによる実行委員会やプロジェクトチームなど、子どもが主体的にプログラムに参画する仕組みを作り、大人が「よりそい」「みまもる」時間を持ちましょう。



2. 目的をブラさない

たとえ面白いアイデアや高い技術があっても、子どもの豊かな育ちにつながらなければ、大人たちの自己満足で終始するおそれがあります。この「**子どもの豊かな育ちのため**」という目的のもと、協力者たちが一致団結している取り組みほど、継続性やつながりの増幅も生まれやすい傾向があります。ただ、時にこの目的が薄らぐこともありますので、実施主体は、かかわる協力者に、この目的を明確に伝えたり確認したりする必要があります。



3. 「数年後には…」というイメージで

単年度として始めた事業でも、想定以上の成果や、次への期待が大きくなることがあります。

「2年後、3年後にこうなったらいいな!」という**中長期的な目線**をもち、取り組みの内容や連携先などについて、無理のない範囲で少しずつでもステップアップさせるイメージで企画を練ることで、次なる課題が見え、計画が立てやすくなります。

4. 分担上手は、協働上手

スタート間もない段階だと、協働相手や協力者の間で、互いに遠慮することもあると思いますが、「餅は餅屋」。無理や負担がないよう、相談しながら役割を分担したり、新たな協力者を求めたりして、関わる皆が楽しみながら集中して取り組めるような**体制づくり**をしましょう。子どもたちの安全管理を含めてさまざまなリスクを回避することにもつながりますし、何より喜びや達成感も得られます。



5. つながって、ひろげよう

さまざまな協力者とのつながりを意識していればいるほど、児童館の枠や空間を超えて、地域の人たちと一緒に、子どもをまん中にしたすてきなプログラムが実現しやすいです。口コミや新聞・テレビの活用などの広報PRも意識して、つながり(大なり小なりの参加の場づくり)を設けましょう。きっとその後も、何かと相談や連携をしやすくなるはずですよ。



NPO支援センター(市民活動センター)*を活用しよう

*名称は地域により異なります

児童館とNPOに限らず、異なる人たちで一つの物事に取り組むとなると、互いの理解や信頼関係づくりが不可欠です。NPO支援センターは、NPOの情報はじめとして、協働事業の経験や、いろいろな組織とのネットワークを持っています。情報収集だけでなく、相談ごとも含めて積極的に活用しましょう。



事例紹介1

小さな地域でも「どんどこ」ひろがる

ふたば児童館

[山形県]



- 2014 畑くらぶで広げよう! 地産地消と紅花パワー
「季節の野菜を育てて収穫・調理、紅花染めにも挑戦」
- 2015 秋の収穫祭～紅花パワー&ずんだ祭り～
地元の特産物である紅花と秘伝豆を育てながら、地域の方と交流
- 2016 僕たちのあそび場づくりプロジェクト
地域の木材を使い、みんなで遊べる遊具や休憩スペースを製作
- 2017 出前児童館&子ども星空映画祭
町内の各地域に出向き、地域の人と交流
- 2018 ワールドコミュニケーションinおおいしだ
海外にルーツを持つ町民から各国の遊びや料理を習い、ワールドフェスティバルを開催、地域の伝統遊びや郷土料理も紹介
- 2019 エンジョイ★パラスポーツ!
地域のバリアフリーを調査し、バリアフリーマップを作成
町内に住む身障者や高齢者とパラスポーツを体験

◎最初の思い

大石田町は農業が盛んだが、子どもたちが畑に関わっていない。同居していても知らない。地元野菜の良さを伝え、地産地消でおいしく食べたい。当たり前のように食べているものの価値を伝えたいと思ったのが最初の思い。協働NPOは、知り合いの知り合いという感じでつてを探った。外部との連携は初めてでどきどきした。2年間、畑に取り組み手ごたえを感じたので、児童館として取り組みたいこと、やってみたいことにテーマを移して6年間取り組んだ。

◎印象的なエピソード

「出前児童館」

過疎地が多く、児童館がどういふところかを知らない人も多かったが、すたれてしまった地域の行事の復活に協力して、すもう大会を復活させたことが印象深い。

「ワールドフェスティバル」

広報を頑張りと、町内のいたるところにポスターが張られ、多くの町民に認知された。海外にルーツを持つ住民が思ったよりも多く、普段は遠慮がちな人もイベントの時は生き生きとしていた。祖国の素敵な一面を伝えたいという気持ちが町の人にも伝わった。

「エンジョイ!パラスポーツ」

高齢者や障がい者と小学生と一緒に楽しめた。小学生も1年生から6年生と一緒に楽しめた。

地域の協力者への謝礼

協力してくれた方にお礼ができることはありがたい一方、適切な金額はいくらなのか、謝金を出すことで関係性が変わってしまうのではないかと悩んだ。



遊び場づくりプロジェクト



出前児童館



ワールドフェスティバル



エンジョイ!パラスポーツ

◎こんな変化がありました…

子どもたち

- 小さいまちでも多様であることに気づいた。コミュニティが小さくても視野が広がった。いろいろな大人と関わるようになった。高学年と低学年と一緒に遊ぶことができた。

地域

- 交流や協力を繰り返すうちに地域の人たちが子どもたちのために何かしたいと思ってくれることが分かり、前向きに考えられるようになってきた。街ぐるみの関係性ができた。何もなくても立ち寄り、差し入れをしたりする人が増えた。新型コロナウイルスの影響で関係性が希薄になっている今、これまでの取り組みで得られた関係性が貴重と感じる。

スタッフからの「イチオシ」メッセージ

- 地域の人との協働を通して、町や地域を知るきっかけになり、いろいろな人とつながり、地域の良さを感ずることができる。
- 協力者の「子どものために惜しまない気持ち」が子どもにも伝わる。
- 幅広い年齢の人が笑顔になることが一番の収穫。

事例紹介2

子どもたちと一緒に成長した地域防災プロジェクト

森の子児童センター

[沖縄県浦添市]



2014 地域福祉マップづくりと福祉体験

「誰もが・安全で・住みよいまちづくり」を目的に、中学生が車いすを押しながら避難経路についての地域調査を行い、中学生の視点で考えた地域福祉マップを作成、発表

2015 防災訓練と地域連携交流学習

前年に作成した避難マップを活用して、中学生が地域住民への働きかけを行い、地域全体を巻き込んだ防災訓練を実施

2016 「第2回勢理客防災訓練」

保育園の近隣企業の社員の皆さんが幼児の手を引いて避難誘導したり、小学校が避難訓練のスケジュールとして参加したりと、地域・学校・児童館・企業が連携した避難訓練を実施

2017 シーサープロジェクト

防災訓練でできた地域とのつながりを活かして、地域の歴史や文化の伝承、多世代交流活動を実施

2020 地域防災キッズプロジェクト

二十歳をむかえた当時の中学生と現在の小学生との交流を通して、中校生が始めた防災訓練を、小学生と地域が中心となった防災訓練に発展させ、次世代へ繋げていく

◎最初の思い

児童館に来る子どもたち(中学生)と、地域の中で活動できることをやってみようという思いと、児童館が福祉避難所に指定されたものの、受け入れへの不安があったことから、防災マップを思いついた。子どもたちが地域を好きになること、地域とつながることは、つらいことがあった時にも強さになる、そのためには汗をかくことも大事と思って取り組んだ。

◎印象的なエピソード

第1回の避難訓練をするときに、子どもたちが手作りのポスターをもって、全戸訪問(2000件)した。ポスターをしながら要援護者の方に「防災訓練の時には手助けしますか?」と声をかけ、民生委員さんと共有しながら避難訓練に臨んだことにより、当日は2,500名を超える人が参加した。

◎こんな変化がありました…

児童館スタッフ

- 参加した子どもたちは、自信がついたのではないと思う。
- 当時参加した子どもの一人は児童館に就職し、県外に行った子どもも、帰省した時には菓子折りを持って訪ねてくる。やんちゃで手のかかる子どもたちだったが、みんなの帰る場所になっていることは本当に嬉しい。

子どもたち

- 児童館のスタッフと関係が近くなってきた。身内、親戚のおばさんみたい。
- 自分たちの経験を踏まえながら、小学生の考えを大事にして接することができている。
- 初対面の方とのコミュニケーション力がついた。
- 進路選択のきっかけになった。
- 友達ができた。人間関係が広がった。

地域

- 避難訓練が地域ぐるみになり、地元企業や小学校を巻き込んだ取り組みになった。
- 2020年は新型コロナウイルスの影響があったが、防災訓練の実行委員会では、地域から「できることをできる方法でやろう」という意見が上がり、訓練に変えて調査を実施した。

当時の中学生がリーダーです



取材には児童館スタッフと当時の中学生たちが参加しました

スタッフからの「イチオシ」メッセージ

- 子どもやスタッフの入れ替わりがあっても、地域と関わることで、いい世代交代ができる。
- 児童館を軸として、地域が主体になるような仕組みづくりにチャレンジできる。
- 子どもたちが地元を好きになったことを実感できる。

事例紹介3

児童館は「ごちゃまぜ児童館」～多文化共生・みんなの居場所～

福知山市立南佳屋野児童館
[京都府福知山市]

2018 世界につながる雀っ子のあそび場

みんなで地域のクリーンアップ、留学生と子どもたちの田舎生活体験、地域で暮らす外国籍住民の文化体験を通じた多文化共生

2019 小さな地球村 ごちゃまぜ広場at Jidokan!

海外の文化体験、日本の文化体験、みんなで防災活動等、2018年の活動を発展して実施



◎最初の思い

いつも遊びに来ていた海外ルーツの子どもから「先生、ぼくは何人なの?」と問われて衝撃をうけた。同じと思っているのに違うといわれたり、排除されたりすることがあり、海外ルーツの子どもの生きづらさを痛感した。この問題に気づいた時期に、当時の館長がNPOと出会うきっかけあり、NPO どんどこプロジェクトへの応募につながった。

福知山市では人権を重視した行政運営を行っており、南佳屋野児童館の他8児童館では「差別を許さない人材育成事業」に取り組んでいる。当地域の特性や課題から市内で比較的、外国籍市民が多く住んでいることも本事業に取り組んだきっかけとなった。

◎印象的なエピソード

言葉だけではなく、文化を理解することが大切だと感じた。一方で、言葉が通じなくても、伝えたい、理解したいという気持ちがあれば、言葉の壁を乗り越えられることもわかった。

ベトナム人技能実習生は、地域のひととの交流がなかったことから、地域と実習生を結びつける役割として児童館として母語でのあいさつ運動を始めようと直接訪問し、ベトナムの挨拶「シンチャオ」と声掛けから始まったことから相互交流につながった。交流が深まることでやりがいにつながり、大きく地域を巻きこむイベントに成長した。

◎こんな変化がありました…

子どもたち

- 間違いを恥ずかしがる気持ちが強かったが、お互いを理解しようという気持ちが、つながる手段になることを発見した。
- 日本も世界の中の一つと気づいた。
- いろいろな人とコミュニケーションが取れるうちに、笑顔が増えていった。



地域

- 地域や企業とのつながりができた。
- 地域の高齢者が日常的に「どうや〜」と顔を出したり、技能実習生が通りがかりに手を振ってきたりするようになった。
- 児童館が子どもの施設からいろいろな人が身近に感じる施設、みんなの居場所にかわっていった。

田舎体験に参加した留学生が、その後のプログラムにも協力してくれた。

自治会長が「(イベントをして)良かったなあ」

日本の子どもたちも自国の文化をあまり知らなかった。

盆踊りの時に浴衣を着つけたり、田舎体験のお屋にそうめんを作ったりなど、地域の人を巻き込んで、みんなで一緒に取り組むことができた。

自国の料理を作りたいということが、なかなか通じなかった。

ドタキャンOKの文化がある。自分たちに楽しいことの方が優先されるのだという文化の差を感じた。

スタッフからの「イチオシ」メッセージ

- いろいろな人と関わり、つながることで、自分の固定概念が変わります!
- NPOと協働することで、海外にルーツを持つ人だけではなく、障がいのある人、高齢者など、地域の多様な課題が見えただけではなく、児童館がこれまで関わりにくいと考えていた人につながる力を持っていることにも気づけた。
- 新型コロナウイルスの影響が続く中で、弱い立場の人にしわ寄せがきている。何ができるのかを考えながらこれからも取り組んでいきたい。

事例紹介4

会えなくても、つながる・ひろがる

鴨島児童館
[徳島県吉野川市]

2018 未来へのトビラを開こう!

～ broadcasting Station ～

子どもたちが放送したい内容を考えて取材を行い「鴨島児童館子ども放送局」としてYoutubeに動画を発信

2019 広い世界にどんどこ繋がれ!

未来へはばたく子どもたち♪

国際ボランティアと日本の学生が地域に滞在して地域との交流を行い、その様子を「子ども放送局」から発信

2020 どんどこつながれ～

未来へはばたく子どもたちProject2020～

オンラインを通じた国際交流を継続し、地域に発信



◎最初の思い

もともと「NPO どんどこプロジェクト」に興味があり、自分たちにできそうなことがあるかと考えていた時に、応募への誘いを受けた。他地域で取り組んでいた「子ども放送局」の取り組みを知り、協働NPOと一緒に取り組めれば、自分たちもチャレンジできるのではないかと思った。子どもたちの「やってみよう!」という声と、保護者の「楽しそうですね」という声も後押しになった。

◎印象的なエピソード

「子ども放送局」や国際ボランティアとの交流で得たつながりは、さまざまな形で新型コロナウイルスの影響を乗り越える力を与えてくれた。海外や県外から人が来られなくなったが、県外の学生とオンラインで日常的にPCまわりのわからないことをすぐに聞いて答えてもらえる関係性ができていたので、できる範囲でやれることをやろうという発想で、オンラインを通じた情報発信や交流にも安心して取り組めた。

◎こんな変化がありました…

子どもたち

- はじめは「ロシアから来ました」といわれても「ロシアって、ドイツのどこ?」というくらい、海外が遠かったのに、ロシアやメキシコの人とビデオレターや年賀状のやり取りをしているほど、世界が身近になっている。

NPOとの関係性

- 最初は、子どもたちとNPOがどう関わっていくのかに不安があったが、今ではプロジェクト以外にもつながりを持つ、信頼できるパートナーになった。一緒に未来を想像、創造していくこと、行動を伴う姿勢に共感した。

地域

- ワークキャンプメンバーの宿泊先、食事の差し入れ、夏祭りやクリスマスなどの行事など、地域の人たちのあたたかさを実感し、関係が深まる場面が増えた。

海外と年賀状を交換したことが、オンラインでの海外交流につながっている。

児童館の行事に、海外の人がオンラインで参加した。クリスマスにはメキシコ・ロシア・スペイン・ベルギーと繋いで交流!!

オンラインで親子ふれあいダンス教室を実施した。

ロシアの人たちとビデオレターを交換した。

鴨島児童館子ども放送局テーマソング「大丈夫」ダンスを作成した

スタッフからの「イチオシ」メッセージ

- NPOとの協働は、化学変化がすごく大きい。お金が無くてでもできることはあるよとNPOスタッフは常に前向き。自分たちもポジティブになる。
- 児童館からさまざまな発信をすることで、児童館の価値を伝えていくことができると実感している。



タイムラインで見えてみよう — 児童館とNPOの協働 —

「NPOどんどこプロジェクト」に取り組んだ児童館のみなさんの体験や感想、事業サポーターのアドバイス(吹きだし)をもとに作成したタイムラインです。

状況

取り組みのきっかけ

企画期

取り組みをはじめる

出会い期

地域にひろがる

実践期

さらなる発展

振り返り期

ポイントとなること

- 子どもたちの「やってみたい」こと
- 地域の魅力や課題を探ること
- 児童館が伝えたいメッセージは何か
- 夢を実現するためのパートナー探し
- 2~3年後の将来像を描く

日々の業務の中で、言語化できていない雑感やモヤモヤを、いったん職員間でつぶやき合ってみるのもよいでしょう。

- 核となる子どもたちの気持ち
- NPOの専門性
- 児童館の専門性
- メインの活動は何か
- メインにつながる活動は何か
- 個々の活動がつながって目標に進むイメージを児童館とNPOで共有する

盛り込みすぎず、小さなところから確実に成果が上がるようなイメージで組み立てましょう。無理は禁物!

- 各活動に参加した子どもたちの気持ち
- 各活動に参加した大人たちの気持ち
- プラスアルファ
- 想定外への対応
- 新たな協力者を巻き込んでいく
- 必要に応じた変更、修正を行う
- 活動の発信方法を考える

巻き込みたい相手方を具体的にイメージしておきましょう。また、NPO・児童館という一対一の関係にとどめるのではなく、実行委員会のような形へ持っていくのも、継続性・発展性という点で有益です。

- 「できた」こと
- 「やり残した」「できなかった」こと
- 「やってみたい」こと

次へのステップにむけた見直し、確認

- 伝えたいメッセージは何か
- 夢を実現するためのパートナー探し
- 2~3年度の将来像

実際にしていること

- 子どもたちの声をきく(子ども会議・目安箱・アンケートなど)
- 地域情報の調査
- 職員会議
- プログラム企画
- 助成金の申請

地域の課題については、自治会、民生委員・児童委員などの地域関係者へのヒアリングもおすすめ。

- NPOとのうちあわせ
- 核となる子どもたちの募集
- プログラム協力者の募集
- メインにつながる活動(子ども会議・準備プログラム)
- 地域の関係者へのご挨拶

「子どもを真ん中に」という思いはNPOも同じです。遠慮することなく、思いのたけを話してみてくださいね。

- 中間振り返り(プログラムの見直し)
- メインプログラムの準備
- プログラム広報

来賓・報告会などの形で、外部の人が現場を見られるしかけがあると、輪が広がりやすくなります。マスメディアも活用しましょう。

- 振り返り会議
- 協力者への報告
- 精算
- 引継ぎ

振り返り会議では、良かった点のみならず反省点もぜひ具体的に出し合ってください。特に反省点については言いづらいこともあるかもしれませんが、思い切って出し合うことが、問題意識の共有や信頼関係の強化につながる側面も。

得られた経験や感じた課題

- やりたいことにつながるNPOがあるのかどうか不安でした
- 助成金のチャンスがあれば活用をお勧めします。資金的な後押しがあるとやりやすいし、やらないといけないという気持ちになります。
- NPO支援センターに相談したところ、パートナー候補の団体を紹介してくれました。思ってもみなかったところだったのでビックリしましたが、自分たちの活動テーマにぴったりの団体さんでした

無理なく、自分たちも楽しめるような構想と一緒に立てられるパートナー団体が見つければ鬼に金棒。子どもの健全育成を専門としていない異分野のNPOとの出会いも有益です。

- 日ごろ子どもたちとの接点が少ないNPOの方は、子どもの持つ力を目の当たりにして最初は圧倒されていた様子でしたが「もっとできるね!」と、児童館では思いつかないプランを提案されて、今度は私たちが圧倒されました。
- 子どもたちの普段の様子をNPOの人に知ってもらえるよう、子どもの来館時間前に打ち合わせを行うなど工夫しました。
- 子どもたちの打ち合わせは、あちこちふらふら…つい口を出したくなるので、我慢が必要と思いました。
- 思ったよりも大変なことになるのではないかと内心焦りました。

- 大人たちが張り切って手伝いすぎてしまい、子どもがすることがなくなってしまいました。NPOの学生ボランティアが間にはいり、大人が学生に教え、学生から子どもたちに教えるようにしたところ、うまく進むようになりました。
- 地域内で児童館の知名度が思ったよりもなかったこと、自分たちも地域のことをあまり知らなかったことにも気づきました。
- 児童館は子どもの行くところ、自分には関係ないと思っていた人たちが、地域の子育てに参加できる場と思ってくれたことは、大きな変化だと思います。
- 児童館のできることは、自分たちが思っているよりも多く、たくさんの可能性があることに気づきました。

- 子どもたちのやる気が続くのは嬉しい一方、中心メンバーが固定されると新しい子どもが入りづらくなるので、バランスづくりが難しいと感じました。
- 大人の熱意と子どもの熱意がかみ合わず、続けられなくなり、残念でした。
- 今回できたつながりを、日常の活動や毎年の行事の中に落とし込めるような工夫が必要と感じました。

とりわけ子どもにまつわる活動は継続してこそという側面がありますが、実施計画が完結した時点で節目をもつことで、むしろ事業が新たなステップへ発展する余地がでやすそうです。



タイムラインを作ってみよう — 児童館とNPOの協働 —



状況

取り組みのきっかけ **企画期**

取り組みをはじめる **出会い期**

地域にひろがる **実践期**

さらなる発展 **振り返り期**

ポイントとなること

- 子どもたちの「やってみたい」こと
- 地域の魅力や課題を探ること

- ▼
- 児童館が伝えたいメッセージは何か
- 夢を実現するためのパートナー探し
- 2~3年後の将来像を描く

- 核となる子どもたちの気持ち
- NPOの専門性
- 児童館の専門性

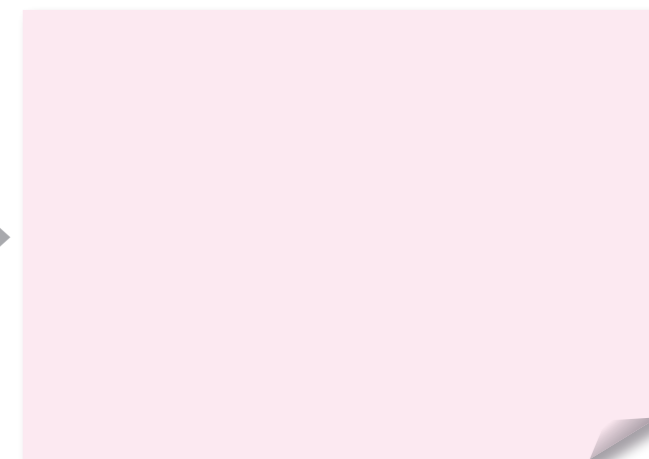
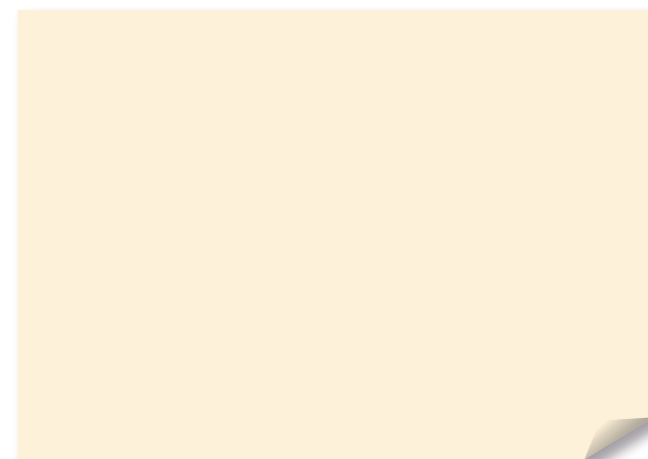
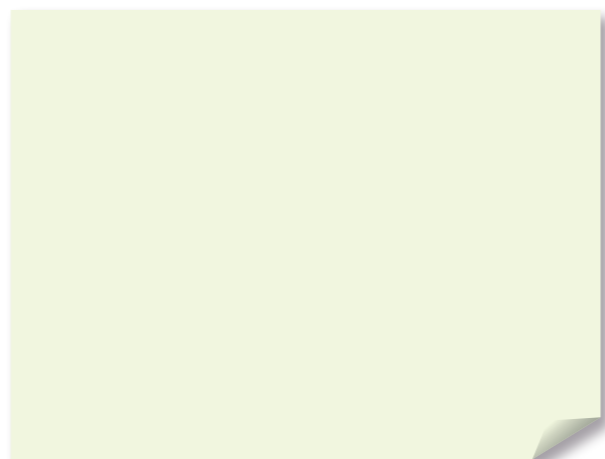
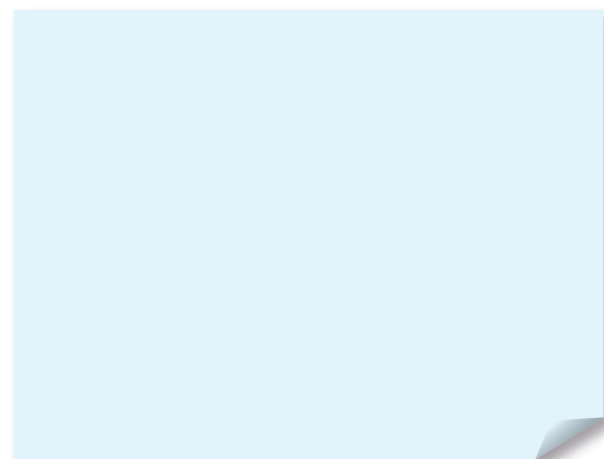
- ▼
- メインの活動は何か
- メインにつながる活動は何か
- 個々の活動がつながって目標に進むイメージを児童館とNPOで共有する

- 各活動に参加した子どもたちの気持ち
- 各活動に参加した大人たちの気持ち
- プラスアルファ
- 想定外への対応

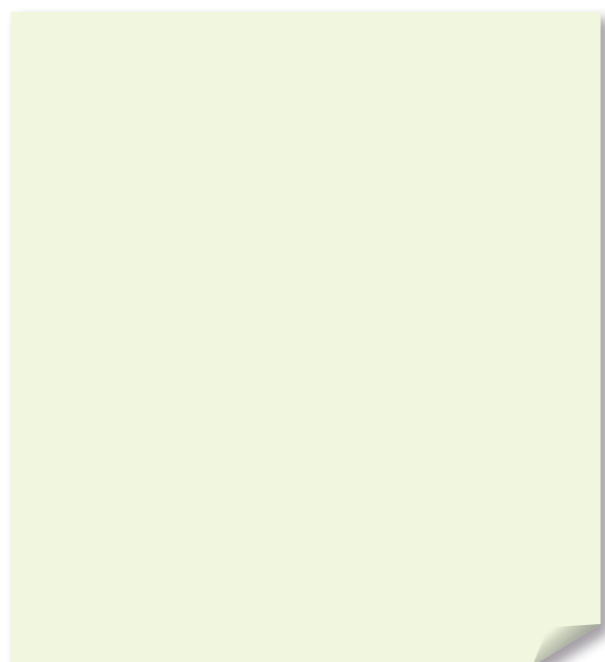
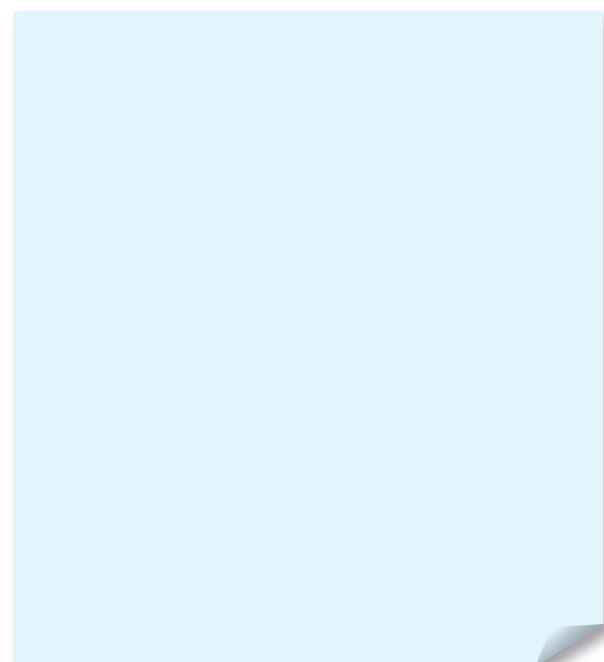
- ▼
- 新たな協力者を巻き込んでいく
- 必要に応じた変更、修正を行う
- 活動の発信方法を考える

- 「できた」こと
- 「やり残した」「できなかった」こと
- 「やってみたい」こと

- ▼
- 次へのステップにむけた見直し、確認
- 伝えたいメッセージは何か
- 夢を実現するためのパートナー探し
- 2~3年度の将来像



実際に行うこと



プロジェクトに
参加した
児童館



※名称等は参加当時の名称です



北海道

- 札幌市**
[北区] エルムの森児童館
[東区] 東苗穂児童会館
[南区] 石山児童会館／みすまい児童会館
[西区] 山の手児童会館
[厚別区] もみじ台児童会館／もみじ台ふれあい児童会館
北見市 緑ヶ丘遊子児童館

青森県

- 黒石市** 幸成児童館

岩手県

- 住田町** 下有住児童館

宮城県

- 仙台市**
[青葉区] 荒巻マイスクール児童館／国見児童館／立町マイスクール児童館／通町児童館
[宮城野区] 榴岡児童館／鶴ヶ谷東マイスクール児童館／東宮城野マイスクール児童館
[若林区] 荒町児童館／連坊小路マイスクール児童館
[太白区] 大野田児童館／金剛沢児童館／八本松児童館／東四郎丸児童館／東長町児童館

- 多賀城市** 鶴ヶ谷児童館

秋田県

- 秋田市** 飯島南児童センター

山形県

- 大石田町** ふたば児童館

福島県

- 福島市** 野田児童センター

栃木県

- 宇都宮市** キッズ・プラザ武蔵台

- 壬生町** 壬生町児童館

埼玉県

- 川口市** 戸塚児童センターあすばる

- 加須市** 加須児童館

- 春日部市** 春日部第2児童センター

- 狭山市** 狭山台児童館

東京都

- 台東区** 玉姫児童館／松が谷児童館
墨田区 フレンドリープラザ立川児童館
目黒区 平町児童館
町田市 玉川学園子どもクラブ ころころ児童館／町田市子どもセンターつるっこ
小金井市 本町児童館
東村山市 北山児童館
西東京市 ひばりが丘児童センター

新潟県

- 新潟市** 豊栄児童センター
燕市 小中川児童館／杉名児童館／西燕児童館／白山町児童館／東児童センター／児童研修館「こどもの森」
阿賀野市 京ヶ瀬児童館
南魚沼市 塩沢金城わかば児童館

富山県

- 黒部市** 中央児童センター／東部児童センター
上市町 こどもの城

石川県

- 金沢市** 浅野町児童館／扇台児童館／富樫児童館／三和児童館

福井県

- 小浜市** 中名田児童館
坂井市 坂井木部児童館

山梨県

- 笛吹市** 八代児童センター

岐阜県

- 多治見市** 笠原児童館
山県市 高富児童館

静岡県

- 掛川市** 大東児童館

愛知県

- 名古屋市中川区** 中川児童館
愛西市 永和児童館

京都府

- 京都市**
[北区] たかつかさ児童館／西賀茂児童館
[左京区] 明德児童館
[下京区] 修徳児童館
[右京区] 御室児童館／嵯峨野児童館／常磐野児童館／西京極児童館
[伏見区] うずらの里児童館／深草児童館／藤森竹田児童館
[西京区] 嵐山東児童館／川岡東児童館／桂徳児童館
福知山市 下六人部児童センター／前田児童館／南佳屋野児童館

大阪府

- 堺市** 大型児童館ビッグバン

兵庫県

- 神戸市**
[東灘区] 魚崎児童館
[灘区] 原田児童館
[長田区] 細田児童館
[北区] 長尾児童館／ひよどり台児童館
[西区] 有瀬児童館／竹の台児童館

和歌山県

- 橋本市** 橋本市立子ども館／児童館(きしかみ子ども館／原田子ども館／名古屋児童館／友愛児童館)

鳥取県

- 鳥取市** 西品治児童館
倉吉市 福吉児童センター

広島県

- 三原市** 三原市児童館
府中町 児童センターバンビーズ

徳島県

- 吉野川市** 鴨島児童館

香川県

- 観音寺市** 遊ゆう児童センター

愛媛県

- 今治市** 枝堀児童館／菊間児童館
新居浜市 川東児童センター
久万高原町 NIKO NIKO 館

福岡県

- 北九州市**
[門司区] 風師児童館／大里児童館／大里西児童館／大里東児童館
[戸畑区] 中原児童館
[小倉北区] 到津児童館／三郎丸児童館／中島児童館／長浜児童館／南小倉児童館
[小倉南区] 菅生児童館／徳力児童館／南曾根児童館／横代児童館
[八幡東区] 山王児童館
[八幡西区] 香月児童館／楠橋児童館／黒崎児童館／小嶺児童館

- 添田町** 添田町立児童館

熊本県

- 益城町** 益城町児童館

大分県

- 佐伯市** 佐伯市児童館連絡会(蒲江児童館／上浦児童館／佐伯児童館／弥生児童館)
豊後大野市 犬飼ふれあい児童館
日出町 日出町児童館

宮崎県

- 西都市** 西都市児童館

鹿児島県

- 枕崎市** 別府児童館
南さつま市 キッズランド児童館

沖縄県

- 那覇市** 安謝児童館
石垣市 石垣市子どもセンター
浦添市 前田ユブシが丘児童センター／宮城ヶ原児童センター／森の子児童センター
糸満市 糸満がじゅまる児童センター／西崎太陽児童センター
沖縄市 福祉文化プラザ児童センター／あげだ児童館
うるま市 みどり町児童センター
南城市 シュガー児童館
南風原町 兼城児童館

NPOどんどこプロジェクトを振り返って

協働のバトンをつなごう——児童館・NPOのみなさまへ

「子どものための児童館とNPOの協働事業（NPOどんどこプロジェクト）」で取り組んできたテーマを振り返ってみると、多世代交流、出前児童館など児童館の本来機能を強化したものもあれば、防犯、バリアフリー、さらには空き家問題など多岐にわたっています。児童館が児童福祉施設として社会課題にどうアプローチができるか、それを子どもたち、地域と共に示すことのできた事業だったのではないかと思います。さらに、2016(平成28)年の児童福祉法の改正を受け、児童福祉業界でも子ども主体、子どもの権利ということがここ数年、非常に重要視され、改正された児童館ガイドラインでも児童館はそれを具現化できる施設として期待されています。子ども主体を10年以上前からコンセプトに含み、実証していたのがこのプロジェクトではない

わくわく感を大切に

「児童館とNPOがタッグを組んだら、きっとおもしろいことになる」

この感覚を信じ、3年間の実験として本事業はスタートしました。はじめ児童館とNPOの接点はほとんどなく、些細なことでボタンの掛け違いが発生しました。しかし、担当者同士の粘り強い相互理解の姿勢、間に入っていたNPO支援センターの巧みなコーディネート、児童健全育成推進財団様のサポート、そして住友生命福祉文化財団様の深いご理解のおかげで、随分長く続けることができました。関係者のみなさまに改めて感謝申し上げます。

本事業では、湧き出るように「どんどこ」協力者が現れる場面をたびたび目にします。それは児童館が子どもを中心に、安心して遊べる時間を大切にしているからだと感じます。

でしょうか。

このプロジェクトで実践してきたプロセス、ノウハウ、関わられた多くの方の熱意とスキルを活かして、このような取り組みが、全国に今後も広がっていくことを願っています。

あらためてこのプロジェクトに長年助成して下さった住友生命福祉文化財団様にお礼を申し上げますとともに、事務局としてリーダーシップを発揮し、各地との細やかな調整役を担っていただきました日本NPOセンター様に心からの感謝を申し上げたいと思います。

一般財団法人 児童健全育成推進財団
事業部 課長 芳網 良

テーマをもち、「こうありたい」という思いを活動に乗せているNPOと、子どもたちの好奇心、関わる人の願いが掛け合わさって遊びのプログラムに昇華する。この過程で生まれるわくわく感は、「活動に参加したい」とより多くの人を動かす素になります。

複数の事例が生まれたことで、私たちの最初の感覚は確信に変わりました。子どもの思いに耳を傾けて実現するため、団体や地域、いろいろな属性の人たちが協力し合っ

て混ざり合い、本気で遊ぶ。
今後もこうしたプログラムが各地で生まれることに期待をしています。

特定非営利活動法人日本NPOセンター
事務局長 吉田 建治



NPOどんどこプロジェクト

地域とつながる児童館づくり [実践ハンドブック]

～「子どものための児童館とNPOの協働事業」から学ぶ協働のコツ～

編集: 「子どものための児童館とNPOの協働事業」事務局
(特定非営利活動法人日本NPOセンター)

編集協力: 古賀桃子(特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター)
一般財団法人児童健全育成推進財団

写真提供協力: 「NPOどんどこプロジェクト」実施児童館

発行: 特定非営利活動法人日本NPOセンター
〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245
TEL:03-3510-0855 FAX:03-3510-0856
日本NPOセンターウェブサイト www.jnpoc.ne.jp
プロジェクトウェブサイト www.npo-dondoko.net

デザイン・イラスト: 出口 城 (Gram)

印刷: 株式会社美巧社

初版: 2021年3月25日



どんどこと
高く大きく子どもたち



〒100-0004 東京都千代田区大手町2-2-1 新大手町ビル245
TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856
E-mail jncenter@jnpoc.ne.jp
ウェブサイト <https://www.jnpoc.ne.jp>

